

平成 16 年度日本光学会総会

平成 16 年度総会は 2005 年 3 月 30 日(水)に埼玉大学において開催された。

まず、黒田和男幹事長より幹事長挨拶が行われたのち今年度の動向についての説明があった。

会員数は、A 会員が 722 名、B 会員が 1131 名、特別会員が 184 口で、ほぼ横ばいの状態で大きな変化はない。年齢別の分布を見ると 40 歳代にピークがある。今後このピークが高年齢側にシフトするだけであると、これは大きな問題で、若い人に魅力のある学会となるよう努力が必要である。

日本光学会では、春秋(実際には、初夏初冬)に講演会、夏冬に講習会を開いている。第 29 回光学シンポジウムは、2004 年 6 月 17,18 の両日、早稲田大学国際会議場で開かれた。参加者は 361 名で、昨年と比べると若干参加者数が減少したが、大変盛況であった。

第 38 回のサマーセミナーは 2004 年 8 月 20,21 日、富士山のふもとにある富士教育研修所(静岡県裾野市)を借り、避暑をかねて山中のリゾート地で開かれた。今回は「3D ディスプレイ～人を感動させる立体表現～」と題し、立体表現の基礎から、視覚効果、実際の応用例まで、3D ディスプレイに関する話題を幅広く取り上げた。3D ディスプレイの原理は古くから知られているが、最近 2D ディスプレイをはじめとする関連デバイス技術の進歩が著しく、実用に耐えるレベルの試作機が開発されている。ナイトセッションではこのような試作機の展示があり興味深かった。

2004 年 11 月 4,5 日には、大阪大学コンベンションセンターで日本光学会年次学術講演会(Optics Japan 2004)が開かれた。今回は春名阪大教授を実行委員長とし、関西在住の委員を中心に会議が企画運営されたが、「おおぜい大阪においてやす」というキャッチフレーズ通りおおぜいの参加者(講演数 309 件、参加者 639 名)を迎え、大変盛況であった。プレナリー講演では、アジア各国との連携の強化を意図し、韓国から講演者を招待した。講演会、併設の展示会いずれも評判がよかった。

第 31 回の冬期講習会は、2005 年 1 月 20,21 日、東京大学山上会館において「光記録の今と未来」というタイトルで開催された。参加者は 88 名であった。「今」は DVD の次世代機をめぐって 2 つの陣営がしのぎを削っている最中であり、実にホットなテーマであった。

このほか、北海道支部(2004 年 10 月 16,17 日)、北陸信越支部(2004 年 12 月 17 日)、名古屋支部(2005 年 2 月 25 日)、関西支部(2004 年 12 月 2 日と 12 月 6 日)主催の講演会が開かれた。

また、3次元画像コンファレンス(2004年6月29,30日)とカラーフォーラム Japan 2004(2004年11月16~18日、本年は日本光学会が幹事学会)が他学協会との共催で開かれた。

国際関係では、International Commission for Optics と共催で光学に関する国際会議 ICO'04 を開催した。ICOの国際会議は毎年数件世界各地で開催されているが、わが国は1964年より10年ごとに会議を組織しており、わが国での開催はこれが5回目となる。これまでは日本学術会議が主催したが、今回は日本光学会が前面に出た開催となった。一岡組織委員長、谷田貝プログラム委員長、立野実行委員長の下、日本光学会が総力をあげて運営に携わった甲斐もあり、成功裏に会議を終えることができた。また、海外の学会との連携に関しては、SPIEとの契約を延長した。

日本光学会は、和文誌「光学」と英文誌「Optical Review」を出版している。「光学」は長期にわたり学会事務センターに出版業務を委託していたが、同センターが破産するという前代未聞の不祥事に巻き込まれることになった。三尾出版委員長の適切な判断により、目まぐるしく変化する困難な事態を無事に乗り切ることができたのは不幸中の幸いであった。結果的には、発行日を遅らせることはほとんどなく(8,9月号の遅れは5日ほど)、第33巻の発行を完了でき、金銭的な被害も生じなかった。10月号から出版業務を学術新報社に移し、雨降って地固まるの例え通り、現在では順調に発行されている。また、将来の電子化を見込んで、FDFファイルの作成も進められている。Web公開の方法について現在検討中である。

英文誌についても本年度は大きな動きがあった。すなわち、その前段階として、植田編集委員長の尽力により紙版をOCRでPDF化し、「Optical Review」の電子アーカイブが完成し、会員限定ではあるが第1巻第1号から最新号までWeb上で閲覧できるようになった。公開に踏み切ったことによりSpringer社との契約も好結果を生んだ。この懸案であったSpringer社との契約も改訂し、新しい契約に移った。近い将来、Springer社を通じて世界的にWeb配信がなされるはずである。これらの成果は、植田編集委員長、高橋出版委員長の活躍によるものである。

最後に表彰関係について報告する。総会に先立ち平成16年度光学論文賞授賞式が行われ、小西毅氏(大阪大学)と齋木敏治氏(慶応義塾大学)に授与された。また、平成16年度日本光学会奨励賞は、Optics Japan 2004において、安野嘉晃氏(筑波大学)と小林直樹氏(静岡大学)に与えられた。受賞者の更なる活躍を期待したい。続いて大澤庶務幹事(総務)より平成16年度事業報告および、平成17年度事業計画、江口会計幹事より平成16年度決算報告および、平尾会計幹事より平成17年度予算案が提示され承認された。総会終了後、小西、齋木両氏による光学論文賞授賞記念講演が行われた。

なお、日本光学会の平成 16 年度事業および平成 17 年度の計画などに関する情報は、第 34 巻第 7 号の「日本光学会平成 16 年度年次報告」の中に詳細が掲載される予定である。